

第 24 回
専門日本語教育学会
研究討論会誌



2022 年 3 月 3 日 (木)
Zoom によるオンライン開催

専門日本語教育学会

THE SOCIETY FOR TECHNICAL JAPANESE EDUCATION

第 24 回 専門日本語教育学会研究討論会誌

目次

●口頭発表

1. 日本留学試験読解問題の語彙コーパスの作成と分析
—非漢字圏高等教育機関進学希望者への読解支援を目的として—
林希和子（大阪大学）…………… 4
2. 専門を学ぶためのレディネスと初年次教育における課題
—ベトナム人留学生と韓国人留学生を中心に—
重田美咲（広島市立大学）、中原郷子（長崎外国語大学）、
竹中知華子（西日本工業大学）…………… 6
3. 日本語ビジネス E メールに見られる配慮言語行動の傾向
—製造業のビジネスパーソンに焦点を当てて—
横川未奈（大阪大学大学院博士後期課程）…………… 8
4. 日本語学習者によるプレゼンテーションに対する評価コメント
—スキーマ形成の促進を目指して—
福良直子（大阪大学）、横川未奈（大阪大学大学院博士後期課程）…………… 10
5. 大学院ゼミの参加経験からみた質疑応答の構造分析
—発言者の「質問」の特徴に着目して—
徐煉（一橋大学大学院博士後期課程）…………… 12
6. 看護師を目指す留学生のためのライティング教材のメリットとデメリット
—留学生へのインタビューから—
山元一晃（金城学院大学）、加藤林太郎（国際医療福祉大学）、
浅川翔子（慶應義塾大学）…………… 14
7. 看護師の語りから見た医療隠語の使用および使用者としての認識
—看護師 20 名への半構造化インタビュー調査から—
ポポヴァ・エカテリーナ（大阪大学大学院博士後期課程）…………… 16

●シンポジウム

「医学用語からみる専門語彙の特徴とその教育」

1. シンポジウムの趣旨
 稲田朋晃（十文字学園女子大学）…………… 20
2. 学習者から見た医学用語
 ダン・タン・ファイ（国際医療福祉大学医学部 5 年生）…………… 20
3. 医学用語の特徴
 三枝令子（専修大学）…………… 21
4. 医学語彙の教育—何をどの順序で学ぶか、いかに学ぶか—
 松下達彦（東京大学）…………… 21
5. 医学英語教育における医学用語教育
 押味貴之（国際医療福祉大学）…………… 21

口頭発表

日本留学試験読解問題の語彙コーパスの作成と分析

—非漢字圏高等教育機関進学希望者への読解支援を目的として—

Creation and Analysis of Corpus-based Vocabulary for previous Reading Tests in the 'Examination for Japanese University Admission for International Students' (EJU):

For the purpose of supporting college-bound learners with non-kanji backgrounds

林 希和子^{※1}

HAYASHI, Kiwako

キーワード：EJU、語彙学習、コーパス言語学、読解

Keywords: EJU, Vocabulary learning, Corpus linguistics, Reading

1. はじめに（背景および目的）

本研究の目的は、日本語教育機関に所属する特に非漢字圏の進学希望者に向けて、読解を行う際に必要な語彙を明確化し、効率的な語彙学習支援への知見を得ることである。国内日本語学校においては、大半の学生が進学を希望し、その対策に時間が割かれている。また近年ベトナムやネパールといった非漢字圏の学習者の割合が増加しており、それらの学生の多くは読解を苦手としている（斉藤・武田，2015）。

非漢字圏の学習者へのサポートとしては、漢字指導の分野において「語彙先習」が実践され、有効性が示されている（中村，2019）。中村（2019）は語彙をリスト化して段階的に学習することが非漢字圏学習者の漢字学習に有効に働くとして述べている。このことを踏まえ、筆者は読解においても、段階に合わせ必要な語彙を提示することが有効なサポートとなると考え、進学を希望する学習者が取り組む読解問題の語彙として、EJU（日本留学試験）の語彙を明確化することとした。また、その語彙が高等教育機関での学習にどのような過不足があるのかを、「日本学術共通語彙」（以下 JAWL）（松下，2011）との関わりから調査した。

2. 方法

本研究ではまず、EJU の読解問題に使用されている語彙がどのようなものであるか、EJU「日本語」読解過去問題 10 年分を、MeCab（工藤，2006）、UniDic version 1.3.12（伝ほか，2009）を用いてコーパス化し、その特徴を、CasualConc（Imao，2013）を用いて分析

した。また、日本語における Academic Word List として作成された JAWL と比較することで、「日本語教育機関で学習する日本語」と「高等教育機関で必要となる日本語」との語彙における繋がりを明らかにした。

更に、作成したコーパスから非漢字圏学習者への読解支援のリストを作成するため、品詞による選別、語彙のレベル付けと基礎語彙の除外、表記の揺れの統合とエラーデータの修正、文書頻度による語彙の選別という 4 段階のデータ選別を行なった。レベル付けは、旧日本語能力試験のレベル（「リーディング チュウ太」（<http://language.tiu.ac.jp/>）のレベル判定ツールを使用）を付与した後、「日本語教育語彙表 Ver 1.0」（日本語学習辞書支援グループ，2015）のレベルを付与し、2 つのレベルから低い方のレベルを採用して設定した。

3. 結果および考察

10 年分の EJU 読解コーパスの延語数は 91,668 語、異なり語数は 6,977 語となった。作成した EJU 読解コーパスと、国立国語研究所によって作成された現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）のコアデータを品詞と語種から比較したところ、その割合は非常に類似したものとなった。このことから EJU の読解テキストはおおよそ日本語の書き言葉テキストのモデルパターンを踏襲していると考えられる。

次に、異なり語 6,977 語から 2. の方法において示した 4 段階のデータ選別と分析によって 1,165 語を抽出した。この 1,165 語のうち 7 割以上にあたる 828 語が中級語彙である。また、基礎語彙除外前の EJU 読解

コーパスのレベル分析でも、異なり語数で56.4%、延語数で29.7%と中級語彙が高い割合を占めた。このことから、EJUの読解問題は中級語彙を中心に構成されていることがわかった。語種は漢語：675語、和語：430語、外来語：31語、混種語：29語と漢語が多かったが、レベルによってその割合は異なっていた。

抽出した1,165語のうち初級語彙223語を「EJU読解初級語彙リスト」とした。このリストは半数以上(119語)が和語であり、口語的な表現や日常的に見聞きする語彙が多く含まれた。179語が漢字を含むが、その大半は日本語能力試験におけるN3~N5レベルの漢字である(図1参照)。JAWLとの共通項目は41語と少ないが、松下(2011)がJAWLの中でも重要と位置づけるJAWL0(70語)と37語が共通している。このリストは、初級段階の学習を終えた学習者がアカデミックテキストに移る前のブリッジ的要素を持った語彙であり、EJUの対策授業に入る前に身につけておくべき語彙だと定義した。

中級語彙とJAWLと共通する上級語彙を合わせた883語は「EJU読解語彙リスト」とした。このリストは漢字を含まない語が94語と少なく、漢語(584語)を中心としたリストである。漢字はN3が大半を占めているものの、N2・N1の漢字も多く含まれている(図1参照)。つまり、このリストは、非漢字圏の学習者にとって学習が困難な語が多く、故に学習が必要な語彙でもある。また、このリストは中級の語彙を中心に構成され、その半数以上がJAWLと共通するため、「EJU読解語彙リスト」を学習することは、EJUの読解対策としてだけでなく高等教育機関進学後のアカデミックテキスト読解にも役立つと考えられる。

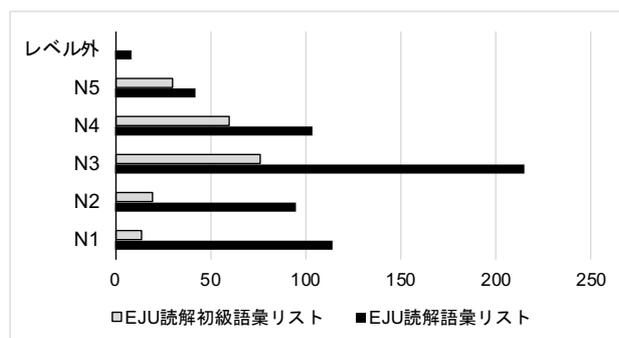


図1 EJU読解語彙リストにおける漢字レベル^{注1}

4. おわりに

学習者は数多ある語の中から、学習する語を選択して学ばなければならない。その選択に際し、基礎語彙、「EJU読解初級語彙リスト」、「EJU読解語彙リスト」、JAWL、専門語彙と段階的に学習していくことが学習者の負担を減らすことになる。特に漢字の意味知識を持っていない非漢字圏の学習者にとって、どの語が今の自分にとって学ぶべき語彙であるのかを知ることは、重要な意味を持つ。本研究では、日本語学校で学習する非漢字圏の進学希望者にとって必要な語彙の一部を2つのリストで明確にした。この2つのリストはJAWLとの共通性の高さから考えて、高等教育機関での学習にも繋がるリストである。学習の段階に合わせた本リストの活用により、効率的な語彙学習の促進が期待される。具体的にはリストの語彙を既存の語彙学習アプリを活用して反復練習させることで、リスト内の語彙を習得させたいと考えている。

(blb1012kiwa5@gmail.com)

注

注1 漢字のレベル付けは「Nihongo-Pro.com JLPT レベル別」(<https://www.nihongo-pro.com/jp/kanji-pal/list/jlpt/>)のデータを使用し、日本語能力試験のN1からN5までとレベル外に分類した

参考文献

- 1) 工藤拓：MeCab Ver.0.996 (形態素解析器) (2006)
- 2) 斉藤信浩・武田英里子：漢字圏、非漢字圏、準漢字圏の日本語学習者の読解テストにおける漢字能力の影響、九州大学留学生センター紀要, 23, pp.61-68 (2015)
- 3) 中村かおり：非漢字圏学習者の負担を軽減する漢字指導の試み、拓殖大学日本語教育研究, 4, pp.31-54 (2019)
- 4) 伝康晴・山田篤・小椋秀樹・小磯花絵・小木曾智信：UniDic version 1.3.12 (解析辞書) (2009)
- 5) 松下達彦：日本語の学術共通語彙(アカデミック・ワード)の抽出と妥当性の検証, 2011年度日本語教育学会春季大会予稿集, pp.244-249 (2011)
- 6) 日本語学習辞書支援グループ：日本語教育語彙表 Ver 1.0 (2015) <http://jhlee.sakura.ne.jp/JEV.html>
- 7) Imao, Y.: CasualConc (Version 2.1.2) (2013)

専門を学ぶためのレディネスと 初年次教育における課題

—ベトナム人留学生と韓国人留学生を中心に—

Readiness for Studying Specialties and Issues for First Year Studies
Focusing on Vietnamese and Korean International Students

○重田 美咲^{※1} 中原 郷子^{※2} 竹中 知華子^{※3}

SHIGETA, Misaki NAKAHARA, Satoko TAKENAKA, Chikako

キーワード：経済学、ベトナム人留学生、韓国人留学生、初年次教育、レディネス

Keywords: economics, Vietnamese students, Korean students, first year study, readiness

1. はじめに

学部留学生は入学後の早い段階で日本人学生と同程度まで専門を学ぶためのレディネスを整えることが望まれる。本研究では、経済学を学ぶためのレディネスと初年次教育の課題について取り上げる。重田・中原・森 (2016)、重田・中原・森 (2017) において、入学直後の中国人留学生 (以下、C) は日本人学生 (以下、J) に比べて経済学を学ぶためのレディネスが整っていないことが明らかになっている。漢字圏出身の留学生でさえこのように困難な状況であれば、非漢字圏出身の学生はより困難な状況にあると考えられる。そこで、本研究では、ベトナム人留学生 (以下、V)、韓国人留学生 (以下、K) を対象に調査を行い、J、C と比較することで、それぞれどのような傾向があるかを明らかにする。その上で、出身国が異なる学生が集まる教室でどのような初年次教育を行うべきかの検討を行う。

2. 調査の概要

調査協力者は、K、V とともに 7 名ずつで、大学入学後間もない 4 月～5 月に調査を行った。全員が N1 合格または N1 に近い日本語能力を有していた。

調査協力者には、重田・中原・森 (2017) と同様に中学公民の経済分野の問題 (『中間・期末テスト ズバリよくでる 社会 公民 清水書院版 新中学校公民』36～37 頁、42～43 頁、48～49 頁) を解かせ、

その結果を重田・中原・森 (2017) の J と C のデータと比較した。

3. 結果および考察

結果として、以下の 4 点が明らかになった。

まず、K、V の得点を先行研究の J、C の得点と比較したところ (有意水準 5%)、主効果が有意であり ($F(3, 103)=17.89, p=.000, \eta^2=.35$)、多重比較の結果、 $J>C \cdot K \cdot V$ という結果となった。やはり、留学生は日本人学生に比べると経済学を学ぶためのレディネスが整っていないことが指摘できる。

次に、母語×解答形式別、母語×内容別、母語×観点別に分析を行なった。

解答形式に関しては、「語句」で $J>C \cdot V$ 、 $K>C$ となり、「記述」で $J \cdot K>C \cdot V$ となり、「誤訂正」で $J \cdot K>C$ となった (主効果 母語: $F(3, 100)=10.28, p=.000, \eta^2=.31$ 、解答形式: $F(4, 400)=27.16, p=.000, \eta^2=.49$ 、交互作用: $F(12, 400)=3.68, p=.000, \eta^2=.20$)。

内容に関しては、「企業活動」で $J \cdot K>C$ となり、「日本の貿易」では $V>K$ 、「地方財政と税制度」では $J \cdot K>C \cdot V$ 、「労働者・消費者の権利」では $J \cdot K>C$ という結果となった (主効果 母語: $F(3, 100)=5.38, p=.002, \eta^2=.16$ 、内容: $F(7, 700)=21.38, p=.000, \eta^2=.55$ 、交互作用: $F(21, 700)=3.64, p=.000, \eta^2=.28$)。

つまり、出身国により得手、不得手があることが

※1 広島市立大学国際学部准教授

※2 長崎外国語大学外国語学部准教授

※3 西日本工業大学デザイン学部講師

窺える。「留学生」として一括りにした指導では粗いことがわかる。どこまで細やかな指導ができるかはそれぞれの教育機関によって異なるが、上記のような傾向があることを日本語教員や専門教員が認識した上で、日々の指導に当たることが重要であろう。

観点別では母語との間に交互作用は見られなかった(主効果 母語: $F(3, 100)=5.57, p=.001, \eta^2=.66$ 、観点: $F(1, 100)=21.16, p=.000, \eta^2=.33$ 、交互作用: $F(3, 100)=0.17, p=.917, \eta^2=.01$)。

そして、正答率が高い問題数(正答率85%以上)、低い問題数(正答率5%未満)に着目して分析したところ、正答率が高い問題数は、J(16問)>K(11問)>V(10問)>C(5問)で、正答率が低い問題数はV(18問)>C(17問)>K(14問)>J(6問)であった。ここでも、日本人学生に比べて、留学生は経済学を学ぶためのレディネスが整っていないことが窺える。また、留学生の場合、正答率の高い問題の殆どが選択肢のある問題、正答率が低い問題の殆どが専門語を答える問題であったことから、選択肢があれば答えられるが、選択肢がなければ答えにくいような知識の習得状況であると考えられる。さらに、Jで正答率が低くなく、K・V・Cで低い専門語には、「公共料金、間接金融、公共料金、地方交付税、消費者庁」があった。このように、留学生のみが低いものに関しては、特に日本語教育における強化が望まれる。

また、表記に関して、Kでは「輸通(流通)、独占(独占)、法印(法人)、クーリンオブ(クーリングオブ)、ベンチャ(ベンチャー)」等の誤りが見られ、母語の干渉を受けたと考えられる。加えて、Kでは、「変(恋)、老(考)、不(下)」といった類似した漢字の誤りが見られ、Vでは漢字表記が期待される箇所での平仮名表記「りえき、ゆうげん、かせん」等が目立ち、漢字の習得が十分でないことがわかる。

4. おわりに

留学生が日本人学生とともに学ぶには、事前準備や授業時間内での配慮が必要である。

初年次日本語教育においては、基礎的専門語の習得を促すことが中心となるだろう。様々な学習活動を通して、選択肢がなくても基礎的専門語が産出できるレ

ベルへと導くことが必要である。大学では、筆記試験、リアクションペーパーの記入等、手書きの機会も少ないため、漢字指導も軽視することはできない。

初年次経済学教育においては、出身国が異なる学生の経済リテラシーの差異を考慮した指導が望まれる。出身国により内容に得手不得手が生じる原因は、出身国の教育事情の相違にあると推測できる。中国やベトナムでは、出身地域や学校によって経済未学習者が存在するのに対して、韓国では、経済が重要な教育領域と位置付けられ、中等教育で充実した経済教育を受けられる。経済学は本来、体系的学問であるため、その修得には膨大な時間を要する。講義時間の都合で教員が厳選し、断片的となった内容を補うために、経済未学習の留学生に対する配慮として、体系的内容を示す資料を別途作成、配布する等の準備が有効であろう。

日本語を母語とせず日本で中等教育を受けていない留学生が、日本の大学において日本人学生と共に学び共に卒業していくためには、初年次教育が非常に重要であり、専門教育、日本語教育の双方から相乗的な効果を狙った指導を行うことが不可欠である。

(shigeta-m@hiroshima-cu.ac.jp)

参考文献

- 1) 小宮千鶴子：留学生のための経済の基礎的専門語，早稲田日本語研究，23号，pp.1-12 (2014)
 - 2) 重田美咲・中原郷子・森邦恵：「留学生のための経済の基礎的専門語」習得に関する一考察—大学入学直後の日本人学生と中国人留学生を比較して—，下関市立大学論集，第59巻 第3号，pp.127-138 (2016)
 - 3) 重田美咲・中原郷子・森邦恵：経済学を学ぶためのレディネスに関する一考察—大学入学直後の日本人学生と中国人留学生を比較して—，下関市立大学創立60周年記念論集，pp.185-194 (2017)
 - 4) 新興出版社啓林館：中間・期末テスト ズバリよくでる社会 清水書院版 新中学校 公民 (2012)
 - 5) 斐光雄：韓国における経済教育の新動向—2015改訂中学校社会科教育課程の経済領域を中心に—，立命館経営学，pp.347-364 (2018)
- [謝辞] 株式会社新興出版社啓林館様と調査協力者の皆様に心からお礼申し上げます。

日本語のビジネス E メールに見られる 配慮言語行動の傾向

— 製造業のビジネスパーソンに焦点を当てて —

Tendencies of considerate language behavior found in Japanese business e-mails:

Focusing on business people in the manufacturing industry

横川 未奈^{※1}

YOKOGAWA, Mina

キーワード：ビジネス日本語、ビジネス E メール、配慮言語行動、ビジネス・コミュニケーション

Keywords: business Japanese, business e-mail, considerate language behavior, business communication

1. 本研究の背景と目的

ビジネス場面では利害関係が働くため、特に相手の声や表情を確認できない E メールでのやり取りにおいては、相手への配慮を伝える言語表現・言語行動が重要であると考えられる。日本語のビジネス E メール（以下 BJ メール）の配慮言語行動の研究には少数名のビジネスパーソン（以下 BP）の事例研究¹があるが、教育実践に資する、より体系的な知見を得るには、さらなる研究が必要である。また、厚生労働省²の調査によると、産業別に見れば外国人労働者数は製造業が最も多いため、当該分野の BP の配慮言語行動の研究は必要性が高いと考える。

そこで本発表では、製造業界所属の 17 名（日本語母語話者 8 名・日本語非母語話者 9 名）の BP が作成した BJ メール（自社都合で取り止めになった打ち合わせのAppointmentを再度取る）のデータから、日本語母語話者・非母語話者の BP（以下それぞれ JBP と NNBP）の配慮言語行動の傾向を明らかにすることを目的とする。本研究では、配慮言語行動を、BJメールの構成や言及内容、配慮表現、表現態度（書き手の意図）であると捉える。

2. 調査概要

会社規模は限定せず、現在日本で勤務している BP を対象に Google フォームの質問紙調査と半構造化インタビューを実施した。調査協力者の年齢は、

表 1 BJ メール関連の学習経験がある BP の人数

1) 勤務先の会社で BJメールの書き方の指導・研修を受けた経験がある。	6名
2) BJメールの書き方についてアドバイス・注意を受けた経験がある。	15名
3) 就職前に日本語による Eメールの書き方（ビジネス以外も含む）を学んだ経験がある。	6名

20 代後半（14 名）と、30 代前半（3 名）である。NNBP の出身地は、中国（5 名）・台湾・韓国・トルコ・スウェーデン（各 1 名）である。日本での勤務年数（転職経験がある場合は合計の年数）は全員 6 年未満であり、1～2 年未満（6 名）が最多であった。役職は、1 名の NNBP のみ主任で、その他は一般社員である。表 1 には、BJ メール関連の学習経験がある BP の人数を示している。

分析では、日本語教育学の観点から形式段落と構成要素を認定する村岡他³の方法を援用し、BJメールの形式段落（視覚的に見た文章のまとまり）数・構成要素の配置から見た談話展開・各構成要素で使用傾向の高い配慮表現^{注1}を抽出した。また、自由記述アンケートやインタビューから得られた BP の配慮言語行動の選択理由も考察の対象とした。

3. 結果および考察

3. 1 形式段落数・構成要素・談話展開の傾向

JBP と NNBP の BJメールの形式段落数は最少 4 段落・最多 8 段落であり、双方において 5 段落構成

^{※1} 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

が最多であった。構成要素は【宛名】・【挨拶】・【連絡理由】・【感謝】・【謝罪】・【依頼】・【結びの言葉】の7点が認定された。談話展開は、【挨拶】の後から【結びの言葉】の前までの用件部分の構成要素の出現順を分析した結果、双方において【謝罪】→【依頼】が最も多かった。【謝罪】は17名中16名のBJメールで確認されたが、1名のJBPは用件が【依頼】のみであった。当該JBPはアンケートで、【結びの言葉】(弊社都合でお手数おかけしまして恐縮ですが、どうぞよろしくお願いいたします。)に打ち合わせを取り止めたことへの謝罪の意を込めたと述べている。

【謝罪】・【依頼】の構成要素内で述べられる具体的な内容は個性が高いが、【謝罪】では15名が自社都合で打ち合わせを取り止めたことへの謝罪を表明しており、それが重要な要素と捉えられていることが分かった。一方、アンケートでは今回のBJメールを作成した際の困難点について、2名のJBPと1名のNNBPが謝罪の程度が難しいと回答しており、難しさを感じる側面もあることが明らかになった。

また、【感謝】は2名のNNBPにのみ現れた構成要素で、「ご多忙の中、x x xの件についてお時間をくださり、誠にありがとうございます。」「昨日のお電話ありがとうございました。」と、いずれも打ち合わせを取り止めたことへの謝罪を述べる前に示されていた。これには、この2名が、相手が自分の依頼を快諾することや、個人間の人間関係とそれに関連する会社同士の関係性を意識しつつBJメールを作成していたことが影響していると考えられる。

3. 2 配慮表現の使用傾向

配慮表現は、謙譲語の「いただく」が頻繁に用いられ、「させていただく」の形でも使用されていた。これはJBP・NNBP共に【依頼】での出現頻度が高く、共起しやすい語は「調整」であった。また、1名のNNBPは【謝罪】において「こちらのトラブルでキャンセルさせていただき、誠に申し訳ございませんでした。」と謝罪表現と繋いでいた。そのため、特にビジネス日本語の教育では、使用場面や共起しやすい語と共に学習者に使用例を提示することや、誤用例から「させていただく」の使用条件や他の表現との結びつきを学ぶことが有用であると考えられる。

さらに、【結びの言葉】における「お忙しいところ恐れ入りますが」のような前置き表現は、JBPは8名中7名が用い、NNBPは9名中2名と差があった。

【結びの言葉】で前置き表現を使用していないNNBPの内の1名は、【依頼】では前置き表現を使用していた。しかし、インタビューではその使用について、毎回、なぜ書き手が恐れ入るのかと疑問を感じつつも、皆が使用しているため自分も使うと述べた。このような使用に対する疑問などが、【結びの言葉】で用いられにくい原因であると推察される。

4. まとめと今後の課題

製造業のBPのBJメールでは、談話展開は【謝罪】→【依頼】が多く、【謝罪】では打ち合わせを取り止めたことへの謝罪が言及されていた。配慮表現は受益を表す謙譲語の「いただく」が「させていただく」の形でも頻繁に使用されていたが、NNBPには不自然な使用例も見られた。NNBPは【結びの言葉】での前置き表現の使用が少なかった。以上から、日本語教育では「させていただく」や、前置き表現の使用の理解を促進することが意義深いと考える。今後の課題は、他の業界のBPの配慮言語行動の分析と、BJメールの受け手が持つ印象や評価に関する調査の実施である。

(mina_8_21@yahoo.co.jp)

付記

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2138の支援を受けたものである。

注

注1 本研究では、対人関係・場面・状況などを踏まえた上で、やり取りする相手の気持ちを考慮して使用される表現であると定義する。

参考文献

- 1) 横川未奈：日本語によるビジネスEメールの配慮言語行動を示す際にビジネスパーソンが抱える困難点—選択意図・配慮表示の際の事例から—, BJジャーナル, 5, pp.25-38 (2022)
- 2) 厚生労働省：「外国人雇用状況」の届出状況まとめ(令和3年10月末現在)(2022)
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_23495.html, 2022.2.17 閲覧
- 3) 村岡貴子・米田由喜代・因京子・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也：農学系・工学系日本語論文の「緒言」の論理展開分析—形式段落と構成要素の観点から—, 専門日本語教育研究, 7, pp.21-28 (2005)

日本語学習者によるプレゼンテーションに対する 評価コメントの分析

—スキーマ形成の促進を目指して—

Analysis of Evaluation Comments on Oral Presentations by Japanese Language Learners:
Towards promoting formation of schema

○福良 直子^{※1} 横川 未奈^{※2}
FUKURA, Naoko YOKOGAWA, Mina

キーワード：プレゼンテーション、評価コメント、スキーマ、日本語学習者
Keywords: oral presentation, evaluation comments, schema, Japanese language learners

1. はじめに（背景および目的）

本発表の目的は、留学生の日本語によるプレゼンテーション（以下プレゼン）に対する評価のコメントを分析することで、プレゼンに関するスキーマ形成に資する教育活動への示唆を得ることである。

具体的には、日本の大学の学部留学生を対象とした上級レベルの日本語授業で、関心のある社会問題をテーマに各学生が行ったプレゼンに対する、他学生からのコメントを分析した。村岡（2014）は、「論文スキーマ」を「研究とは何か、論文とは何か」に関する概念知識の総体と定義し、ライティング能力獲得の支援方法として、論文スキーマを有する学習者のコメントの活用を提案している。本発表では、プレゼンを研究活動の重要な構成要素と捉え、論文スキーマの下位区分である、プレゼンに関するスキーマ形成に着目する。

日本語学習者によるプレゼンの評価に関する先行研究は、ルーブリックによる自己評価の実践報告（内山 2018）や他学生に対するコメントの分析（花城 2017）など複数あるが、スキーマ形成と関連づけた研究は見られない。本発表は、評価コメントの活用によるスキーマ形成への有効性を論じるものである。

2. 授業の概要

2.1 授業期間および受講生の特徴

本発表で扱うプレゼンは、関西地区にある総合大学

の学部生を主な対象とした日本語の授業で実施した。授業期間は、2021年4月～8月である。受講生は19名で、主に学部の1、2年生が履修し、3、4年生も若干名含まれる。学生の専門分野は、文系、理系問わず多岐にわたり、国籍も多様である。日本語レベルは、JLPTのN1およびN2合格相当の学生が混在していた。

2.2 授業の目的と内容

対象とした授業の主な目的は、学術的な日本語を理解し、使用するための基礎的な日本語力および論理的・批判的思考力の涵養である。全15回の授業では、序盤はコロナ禍の社会問題に関するニュース動画の聞き取りや関連した内容について簡潔に書く練習、および構成に留意して話す練習などを行った。中盤は、プレゼンのトピックの決め方、データ収集や引用の手続き、スライドや発表原稿の作成などを学び、グループで検討する時間を取りつつ、段階的に発表準備を進めた。終盤には、5週にわたり発表会を実施し、一人一回、合計19回のプレゼンを行った。発表原稿とスライドは、教員による添削後、学生が各自修正の上、プレゼン（発表時間10分間、質疑応答10分間）に臨んだ。

また、宿題として他学生に対する評価シートと発表者には自己評価の提出を求めた。シートでは、6点の項目（テーマと内容・構成との整合性、背景の説明と問題提起の適切性、主張と根拠の対応、データの信頼性と適切な引用、スライドのわかりやすさ、質疑応答での対応）を5段階で評価し、シートの自由記述欄には、コメントや質問を書くよう指示した。なお、授業

^{※1} 大阪大学国際教育交流センター講師

^{※2} 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

においてコメントシートに対するフィードバックは実施していない。

3. 方法

各学生のプレゼンに対する12名分の216のコメントを対象に、評価の観点を分析した。

例えば、以下の学生 A^{注1}のコメントでは、下線部(1)を「テーマの選択」、(2)を「構成」、(3)を「時間管理」に対する評価として、観点を分類した。

「(1) テーマはいいと思います。しかし、(2) 言いたいものが多すぎて逆に各点も深く紹介されていない感じがします。そして (3) 時間をちょっと短くした方がいいと思います」

なお、受講生 19 名のうち、すべてのプレゼンに対するコメントを提出した 12 名を対象とした。

4. 結果および考察

分析の結果、言及された主な観点は、「スライドのわかりやすさ、見やすさ (58 例)」、「発表からの学び (39 例)」、「テーマ選択 (32 例)」、「データの質と量の妥当性 (31 例)」であった。その他は、「話し方」や「構成」、「発表内容への同意や反論」、「質疑応答への対応」、「時間管理」などであった。授業に対する各学生の動機付けの違いも否めないが、同じ観点から漠然としたコメントを繰り返す学生は、スキーマが未形成であり、あらゆる観点から、具体的に深くコメントをしている学生は、スキーマ形成が進んでいるものと考えられる。これは、村岡 (2014) の大学院レベルの学習者を対象とした、論文スキーマ形成に関する調査結果に通ずる。

例えば、「質疑応答」に関して、学生 B は、他の学生に対する全 18 のコメントの内、「質疑応答への対応も良くて、自分のテーマについて多くの知識を持っていることがわかる」という同じコメントを 6 回繰り返していた。一方で、学生 C は、「質疑応答の時の対応はハキハキとした態度だったので、とても良かったと思う」と述べた上で、改善点として「「なんか」や「多分」という主観的な言葉遣いを避け、数値による裏付けの提示をもう少し欲しかった」と述べ、質疑応答での態度や日本語表現に加え、デー

タの妥当性についても指摘していた。

また、発表会 1 週目と 5 週目のコメントを比較すると、スキーマ形成の過程の一端がみられた。具体的には「データの質と量の妥当性」に関して、学生 D は、1 週目は「何よりも、さまざまなデータが提示されている点が良かった」と述べ、5 週目は「さまざまな事例が提示され、より説得的であったと思う。主張を裏付ける根拠が多かったことが主張を強化してくれたと思った」と述べた。

以上のように、初回に比べ記述がより精緻化していることから、質疑応答時に他者の観点を知ることや批判的にコメントを書くことを繰り返すことにより、スキーマ形成が促進されたものと考えられる。

5. 結論と今後の課題

以上のように、評価コメントの質と量には、各学生のスキーマ形成の度合いが認められる。本調査により、スキーマ形成の促進には、コメントの活用が有効である可能性が示唆された。プレゼンの事例に沿って、スキーマを有する学生と未形成の学生が学び合うことは、学習者が自身の観点を振り返り、新たな評価基準を内在化することに役立つものと言える。これは、本授業の目的でもある、大学教育に必要な批判的思考や論理的思考の涵養の促進にもつながる。プレゼンのスキーマ形成に資する具体的な教育活動の提案については、今後の課題である。

(fukura-n@ciece.osaka-u.ac.jp)

(mina_8_21@yahoo.co.jp)

注

注1 個人情報保護の観点から、アルファベットで示した。

参考文献

- 1) 内山喜代成：口頭発表クラスにおけるマイルーブリックの活用，名古屋学院大学論集 言語・文化篇，第 30 巻第 1 号，pp.57-70 (2018)
- 2) 花城可武：日本語学習者はどのように他学生の口頭発表を評価しているのかーコメントシートからわかることー，日本語教育方法研究会誌，Vol.24 No.1，pp.86-87 (2017)
- 3) 村岡貴子：専門日本語ライティング教育 論文スキーマ形成に着目して，大阪大学出版会 (2014)

大学院ゼミの参加経験からみた質疑応答の構造分析

— 発言者の「質問」の特徴に着目して —

A Structural Analysis of Question and Answer from the Perspective of Graduate School Seminar Participation
Experience: Focusing on the characteristics of the speaker's questions

徐 煉^{※1}
XU, Lian

キーワード：ゼミ、質問、発話機能、参加経験

Keywords: seminar, question, speech function, participation experience

1. はじめに

日本の文系大学院ゼミナール（以下、ゼミ）で行われる質疑応答は、少人数の間における発表内容について質問・意見を行うことが中心である。

金（2006）は、留学生の研究発表後の「質疑・応答」活動における質問が発表者の内省を促進すると指摘しているが、発表者と質問・コメントを行う者（以下、発言者）との質疑応答において、「質問」がどのように行われているかはまだ明らかになっていない。しかし、質問の特徴を明らかにすることは質疑応答の質の向上につながるため、分析する必要がある。黄（2017）は修士1年生に対する縦断的なインタビュー調査から、1年間で徐々にゼミに参加できるようになったと報告しているが、実際の談話データを扱った研究は少ない。そこで、本研究はゼミ参加経験が発言者の「質問」に与える影響を解明する。具体的にはゼミ参加経験が異なる発言者の質疑応答の談話について、その構造を解明し、そこで観察された質問形式の特徴を明らかにする。

2. 分析対象と分析方法

データは4つの東京都内の日本語学・日本語教育学系大学院ゼミの質疑応答（190分）である。ゼミは、発表者の研究発表→質疑応答→教員のコメントという流れで行われ、質疑応答の部分のみを対象とした。それぞれのゼミの参加者は9～16名で、発言者には、日本語母語話者が20名、中国語母語話者が15名であった。黄（2017）の指摘を踏まえ、大

学院ゼミの参加経験が1年未満の発言者13名、修士論文未執筆の1年以上3年未満の発言者10名、修士論文執筆経験のある3年以上の発言者15名に分けて分析する。各ゼミが扱う主要なテーマは、語彙・文法教育、談話分析、第二言語習得である。対象としたデータの発表者は全員中国語母語話者の修士1年生で、発表者と発言者との親疎・上下関係や、発表者の研究内容に関する情報量の差などが質疑応答に与える影響を考慮し、発表者の属性を固定した。発表者の発表テーマは、「的」の日中対照、ビジネス場面におけるスピーチレベルシフト、複合動詞の習得、役割語の翻訳などだが、いずれも研究対象の分析方法が決まっておらず、どのような分析方法を採用することもできる段階であった。そのため、発言者は各自の知識を生かして質疑応答に参加可能であった。また、発言者は、均等に発言していた。

徐（2021）は大学院ゼミの質疑応答談話について研究発表を行う発表者と質問・コメントを行う発言者別に発話機能を提示している。本研究は徐（2021）の発話機能を用い、説明・情報・意見の追加や確認を要求する機能を持つ発話機能を「質問」、説明・情報・意見の追加や確認を提供する機能を持つ発話機能を「コメント」とし、質疑応答の構造を分析する。

3. 結果および考察

3.1 質疑応答の談話構造

「質問型」「質問ーコメント型」「コメント型」の3種類の談話が観察された。「発言者の質問→発表者の回答」という展開（の繰り返し）しか持たない「質

※1 一橋大学大学院生

問型」が19例、「発言者の質問→発表者の回答→発言者のコメント」という展開（の繰り返し）を持つ「質問－コメント型」が34例、「発言者のコメント→発言者の回答」という展開（の繰り返し）しか持たない「コメント型」が12例であった。質問を含む「質問型」「質問－コメント型」についてゼミ参加経験別に出現数を集計した結果、「質問型」は1年未満の発言者の使用が多く、52.6%を占めた。「質問－コメント型」は3年以上の発言者の使用が多く、55.9%を占めた。また経験が長くなるにつれて、「質問型」の使用が少なくなる一方、「質問－コメント型」の使用が多くなることが分かった（表1）。

表1 ゼミ参加経験の多寡からみた談話構造

	質問型	質問－コメント型
1年未満	10(52.6%)	6(17.7%)
1年以上 3年未満	7(36.9%)	9(29.4%)
3年以上	2(10.5%)	19(55.9%)
合計	19	34

3.2 1年未満の発言者の「質問型」

1年未満の発言者の「質問型」における「質問」を分析した結果、質問の連続が2回以内のものが7談話であった。よって、1年未満の発言者は、1～2回の質問だけでやりとりが終っているといえる。

談話例①：質問型・1年未満

- 72 発言者：この例、母語話者と NNCA(学習者)の話は、これは、実際にこの会話を録音して残したんですか。【質問】
73 発表者：あ、実際録音したものです。

3.2 3年以上の発言者の「質問－コメント型」

3年以上の発言者の「質問－コメント型」の「質問」を分析した結果、質問の連続が2回以上の談話が13談話あり、「段階型質問」が含まれる9談話、「意見型質問」が含まれる4談話が観察された。

「段階型質問」は段階を踏まえて質問を行うため、発表者には理解されやすい。一方、「意見型質問」は発言者の意見などを質問の中に盛り込んだ内容が多かったため、発表者の回答には言いよどみが多く発生し、質問の理解・対応に困難を示していた。つまり、質疑応答に慣れていない修士1年生に対しては段階型質問の方が効果的であるといえる。このことは、参加経験が発言者の質問に与える影響を示しており、質問について発表者の背景を踏まえた形式の選択が重要であることを示唆している。

談話例②：段階型質問・3年以上

- 911 発言者：えっと、つまり 4.1 の内容と（はい）、4.2 の内容は どういう関係でしょう。【段階型質問】
912 発表者：あの一、4.1 の内容はその…（中略）、その誤用しやすい点を焦点として、そのあとの…、本調査のなかで出題する。
913 発言者：お一。その 4.1 のところから（はい）、どうやって誤用しやすいものを？【段階型質問】

談話例③：意見型質問・3年以上

- 114 発言者：なので、研究するときも、たとえばその“食べ終わった”ときは、その後項の“終わる”とか、あとはその、たとえば、その“持ち上げる”とか、それは、後項は普通の語彙的なものと違って、たくさんものと組み合わせるのができますよね？【意見型質問】
115 発表者：《沈黙3秒》はい。
116 発言者：たとえばその“食べ終わる”の場合は、ぜったい“食べ終わる”を教えるんじゃなくて、“なにに+終わる”で教えているんですよね？【意見型質問】
117 発表者：うん…。

4. おわりに

本研究では、日本語学・日本語教育学系大学院ゼミの質疑応答を対象に、発言者のゼミ参加経験による質疑応答の構造と「質問」の特徴を分析した。「質問型」は1年未満の発言者が多用し、質問の連続は2回以下が多かった。一方、質問の後にコメントがつく「質問－コメント型」は3年以上の発言者が多用し、質問の連続は3回以上が多く、「段階型質問」「意見型質問」が観察された。このことから、ゼミ参加経験が質疑応答の構造、質問の形式に影響を与えることが示唆された。今後は、「質問」と「コメント」のつながりも含めて分析したい。

(zyoren384@gmail.com)

参考文献

- 1) 金孝卿：研究発表の演習授業における『質疑・応答』活動の可能性—発表の内容面に対する「内省」の促進という観点から、世界の日本語教育, Vol.16, 国際交流基金, pp.89-105 (2006)
- 2) 徐煉：大学院のゼミ談話における質疑応答の特徴の分析：発話カテゴリーと発話機能の設定に向けて、一橋日本語教育研究, Vol.9, pp.61-76 (2021)
- 3) 黄均鈞：新参者が大学院ゼミの質疑応答活動にどのように参加しているか：ある中国人留学生への縦断的調査から見えてきたもの、言語文化教育研究, Vol.15, pp.75-92 (2017)

看護師を目指す留学生のためのライティング教材の メリットとデメリット

—留学生へのインタビューから—

Advantages and disadvantages of learning materials for writing for international nursing students

○山元 一晃^{※1} 加藤 林太郎^{※2} 浅川 翔子^{※3}

YAMAMOTO, Kazuaki Kato, Rintaro ASAKAWA, Shoko

キーワード：看護教育、ライティング教材、実習記録

Keywords: nursing education, learning materials for writing, nursing practice records

1. はじめに（背景および目的）

発表者らは、看護師学校養成所の演習や実習において求められる実習記録など看護特有の様式に適切に記入できることを目指した教材を作成してきた。適宜改良を重ね、2018 年から約 3 年間にわたって留学生向けの日本語の授業で使用を続けてきた。一方で、教材の妥当性や有効性についての調査は行っていなかった。そこで、難易度、使いやすさ、有用性など教材の妥当性に関するインタビューを行った。

教材の具体的な内容については、山元・浅川・加藤（2021）で、具体的な開発過程については、加藤・山元・浅川（2019）で詳しく述べているので、ここでは簡単に紹介する。

教材は、「実習を含む大学等での学びに即していること」と「専門分野における非母語話者を対象とした日本語教育に有用であること」を考慮し作成した（山元・浅川・加藤 2021）。表 1 に示したように、各課で学習することは、それぞれ看護教育における課題（レポート・記録物）に対応している。ほとんどの課は、情報源が提示されている。たとえば、第 2 章第 1 課や第 3 課では、電子カルテが情報源となっている。これは、看護師である浅川が架空の患者を想定し作成したものである。各課は、不適切な箇所を見つける「間違い探し」、それについての「解説」「コラム」「練習問題」「模範解答」からなる。

想定している日本語レベルは、上級以上としてお

り、常用漢字外の漢字には振り仮名を振った。

授業は、毎週 1 回（90 分）、15 週を基本としている。受講者は、改善すべき点を含む各様式への記入例を見て、どこに問題があるか、どのように改善できるかを考える。その後、授業担当者が、いくつかのポイントに分けて、当該の様式に記入する際の注意点を説明する。さらに、いくつかの練習問題を解いて理解したところで、表 1 の情報源を参照しながら、白紙の様式に記入していく。

2. 方法

国内の大学の看護学部には所属する留学生 5 名（4 年生 2 名、3 年生 3 名）に対して教材についてのインタビューを行った。協力者は、所属大学の 1 年生後期にこの教材を教科書とした授業を履修している。インタビューは内容の難しさや有用性などに関する事前アンケートへの回答を踏まえながら 40 分程度行った。なお、4 年生の 1 名のみベトナム語母語話者であり、その他は、中国語母語話者である。

3. 結果

教材の日本語の難しさ（「1. 簡単だった」～「5. 難しかった」の 5 件法）については、4 名が 3 と回答し、いずれも、当初は難しいと感じたが、徐々に慣れてきたと答えた。また 1 名が 2 と回答し、簡単だったと述べたが、役に立つ内容もあったとのことだった。「行動計画」（計画の記載方法）「先生とのメール」（メールの書き方）は 5 名が役に立ったと回答した。前者は、「練習と実際が同じだった」などの指摘があった。後者は、「今でも参考にしている」との指摘があった。また、「患者情報の記録」については、

※1 金城学院大学文学部講師

※2 国際医療福祉大学総合教育センター助教

※3 慶應義塾大学看護医療学部助教

表1 テキストの構成と対象となる課題・情報源 (山元・浅川・加藤 2021)

	課のタイトル	看護教育において対応する課題	情報源
【第1章】実習前	・第1課 私の理想の看護師	入学初期のレポート	なし
	・第2課 施設情報	施設情報シート	施設のホームページ
	・第3課 行動計画	行動計画シート前半	友だちとの会話
【第2章】実習中	・第1課 患者情報の記録	患者情報整理シート	電子カルテ
	・第2課 1日の振り返り	行動計画シート後半	友だちとの会話
	・第3課 看護展開	アセスメントシート	電子カルテ・患者へのインタビュー
	・第4課 看護計画	看護展開シート	アセスメントシート
	・第5課 先生とのメール	なし	なし
【第3章】実習後	・第1課 まとめのレポート	実習後に提出するレポート	これまでの成果物

4名が役に立ったと指摘していた。「授業や実習と同じ」「記録すべき要点と、それをどのように書いたらいいかが理解できた。」といった指摘があった。

一方、「施設情報」(収集した情報の記載方法)、「私の理想の看護師」(レポート)は役に立たなかったようである。前者については、施設から情報提供があるなど、実際にはそれほど難しくなかったようである。後者については、「既習の内容」「授業であまり活用しなかった」という指摘があった。

実際の日本語との相違については、全員が「変わらない」または「大きな違いはない」と回答した。

各課の内容については、「練習問題」「模範解答」については4名の学生が役に立ったと指摘した。前者については「練習があったから実習でスムーズにできた」「基礎が身についたので迷わず授業に参加できた」などの指摘があった。後者については、「書き方の参考になった」とのことだった。一方、「解説」については、「もう少し詳しい方がいい」との指摘もあった。

教科書の使いやすさについては、「専門の授業の予習になった」「手本を実習時に参考にできた」などの指摘があった。また、自習でも使えるかについては、「自習にも使えるが難しい」「参考にすることができ、使えると思う」「教科書のレベルが基礎的なので、授業で扱うことが必要」という意見があった。

その他、「専門用語も学びたい」、「カンファレンス

などで使う表現や語彙も学びたい」など専門性を高めて欲しいという意見もあった。

4. 考察

レベル、使いやすさの観点から、一定の評価を得たと考えられる。一方、必要性を感じられなかった留学生が多かった項目もあった。この点については他の内容に置き換えるなどの検討が必要だろう。

専門性を高めて欲しいという意見もあったことから、カンファレンス、患者や指導者との会話など、ライティング以外の内容についても含めていく必要がある。

(メールアドレス yamagen.98@gmail.com)

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00744 の助成を受けたものです。

参考文献

- 1) 加藤林太郎・山元一晃・浅川翔子:「状況」から出発する日本語教育 実践報告:看護系留学生のためのライティング教材開発 -電子カルテ等からの情報収集による課題遂行を中心に-, 早稲田日本語教育学, Vol.27, pp.31-35 (2019)
- 2) 山元一晃・浅川翔子・加藤林太郎:看護師を目指す留学生のためのライティング教材の開発とその活用, 金城学院大学論集 人文科学編, Vol.18, No.1, pp.129-139 (2021)

看護師の語りから見た 医療隠語の使用および使用者としての認識

—看護師 20 名への半構造化インタビュー調査から—

Medical Jargon Usage and its Users' Recognition Viewed from the Nurses' Narrative:

Based on the Results of the Interview Survey with Participation of 20 Nurses

ポポヴァ エカテリーナ^{※1}

POPOVA, Ekaterina

キーワード：医療隠語、看護師、患者、配慮、コミュニケーション

Keywords : medical jargon, nurses, patients, consideration, communication

1. はじめに

医療現場で用いられる業界用語には集団内部の秘密秘匿のために部外者に理解されないよう使われる隠語がある。隠語は医療現場でのコミュニケーションの道具として機能し¹⁾、患者に不安を与えないためにも使われる¹⁻³⁾。同時に、分からない用語は患者に不安をもたらす可能性があるという指摘²⁾もあり、使用には注意が必要である。隠語は現場で初めて習得されるため、現状では看護師は先輩から教わる²⁾が、隠語を含む業界用語の意味を先輩に聞けず困難を感じる看護師もいる⁴⁾。したがって、隠語の正確な意味や使用法の情報は入手しにくく、特に新人看護師や日本語非母語話者の看護師には理解困難になると推測される。そのため、学習支援に向けた隠語の使用状況を質的に調査する必要があると考えられる。そこで本発表では、医療隠語の使用状況および隠語使用者の認識について看護師の語りから明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

2020年3月から11月の間に施設や診療科を限定せず、関西地区の医療施設に3年以上勤務経験がある日本人看護師20名を対象に半構造化インタビュー調査を行った。調査では隠語使用の場面、意図、相手などの使用状況を尋ね、その内容は文字起こしを行って、データ化した。

3. 結果および考察

3. 1 患者やその家族への配慮としての隠語

看護師20名中10名が隠語を使用すると回答した。そのうち8名が、隠語使用の理由として、患者や家族にストレスを与えないための配慮を挙げた。具体的には、看護

資料1 患者への配慮に関わる隠語使用とその是非

協力者A：患者さんがいる前で、私が先生にどうしても電話を、患者さんいる前でその状況を報告しないといけないとかがってなったら、ちょっとそういう時に言葉を考えるかな。「先生、膿んでるんです。膿出てます」とか言うと、すごく患者さんが、めっちゃ嫌というか、なので「ちょっとアイテル認めます」とか(中略)何か患者さんが訴えられることを違う言葉に変えないで伝えた方がいい時は、そのまま伝えますよね、その方が誠実というか。

師は、配慮のために①疾患や症状、②死亡、③排泄物に関わる情報を隠語に言い換えることが明らかになった。

例えば、協力者Aは、症状の悪化などを患者の前で医師に報告する必要がある時に「言葉を考える」と述べた(資料1)。管を挿入しているところに膿が出ていることを報告する時に、「アイテル(ドイツ語のAiterから：膿)」を使用し、「ちょっとアイテル認めます」のように言う。その理由は、化膿のことを直接言うと「患者さんがめっちゃ嫌」のように説明した。また、患者の訴えを他の言葉に換えずに報告すると付け加えられたことから、選択的な隠語使用の必要性が示唆できる。他に看護師同士で隣接する病室で死亡した患者のことを明言せず、「ステルベン(ドイツ語のSterbenから：死亡)」を使用する例もあった。他の患者の死亡に関する隠語への言い換えは、ポポヴァ(2020)²⁾でも報告されているが、本研究では死期が迫った患者本人の死亡やその処置について話す時にも隠語が使われることが分かった。また、他の患者に聞こえて羞恥心を与え得る排泄物の量などの情報を共有する際に「ハルン(ドイツ語のHarnから：尿)」を使うというような、従来報告されなかった使用例もあった。

さらに、資料2のとおり、医師に電話して「患者さん心停止です」という報告をした際、患者を不安にさせないた

^{※1} 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

資料2 配慮としての隠語使用の要求

協力者B：前聞いた話では、ICUとかで急変があって、「患者さん心停止です。」って先生に電話をしたんですって。その先生にすごい怒られた。「心停止って言ったら、他の患者さんが聞いてるだろう。」みたいな感じで、「英語で言え」みたいな、「違う言葉で言え」って怒られたっていう話は聞いたことあったりするんで、それは患者さんに心配をかけないように（後略）。

めに隠語を使用するようにと医師に注意された看護師もいた。それらの事例から、医療隠語は、患者にストレスや羞恥心を与えないように使用され、さらに配慮のための隠語使用が求められる施設もあることが分かる。ただし、隠語使用の適否の判断に困る看護師もいた。

3. 2 患者の個人情報保護としての隠語

隠語を使用する10名中3名は、業務上の情報が患者に理解されないように使うと回答した。具体的には、看護師が患者の個人情報を隠語に言い換えることが分かった。患者の個人情報保護は、医療従事者の義務であるが、医療施設では、看護師が常駐するナースステーションは開放的なオープンカウンター式になっていることが多いため、看護師の会話内容が他人に聞こえないような環境を作るのは困難である。資料3にもあるように、ナースステーションでの会話内容は患者に聞こえ、個人情報の流出になる恐れがある。患者の個人情報が漏洩しないように、協力者Cは、患者には分かりにくい英語・ドイツ語・略語など「業界用語的なもの」を隠語として使用すると述べた。

以上から、患者から離れて他者に聞かれないような環境の整備が困難なオープンな施設では、隠語は医療従事者の業務の効率化を促していると考えられる。

3. 3 隠語使用に対する批判的な意見

隠語を使用しない10名中2名が、手術室で麻酔がかけられている患者には特段の配慮の必要性がないという理由などを提示した。一方、隠語に対して批判的な意見を持っている看護師もいた。資料4のように、協力者Dは、患者にとって理解不可能な言葉で会話をすると、患者に不快感を与えるため、医療従事者は「隠し事」をせず、患者や家族に全て誠実に伝えるべきだと断言した。また、患者の個人情報が漏洩しないようにナースステーションで隠語を使っている協力者Cは、患者が聞いた言葉をインターネットなどで調べて、「変なふうに理解してしまうと、信頼関係が崩れてしまう」という理由で、処置中などに患者の前では隠語を使用しないと語った。このように、患者の前での隠語使用は、患者に不快感を与え、患者との信頼関係を崩しかねない側面もあるため、患者の診察や処置

資料3 個人情報漏洩の回避に関わる隠語の使用例

協力者C：ナースステーションがあって（中略）オープンなので、どうしても声が漏れてしまうと、本人の個人情報とかになるので、小さな声で短時間で患者さんに聞こえたととしても内容が分からないようにというので、業界用語的なものは使うのかな。患者さんの個人情報が漏れないように。

資料4 隠語使用を批判する看護師のコメント

協力者D：患者の前では分からない言葉をしゃべらないようにしてます。患者さんはやっぱり知る権利があるので、知らない言葉で医療者同士で話すると、やっぱり患者さんが不快に思いますし、全部伝えられることは医療者の側がちゃんと患者さんや家族に伝えるべきだと思っているので、もう隠し事はしないっていうか、ちゃんと、誠実に伝えるのが必要だと思っています。

の時に隠語の使用を控えるなどという選択的な使用の必要性を強調する看護師もいる。

4. 結論と今後の課題

医療現場では自己の疾患や不快感を伴う検査でストレスを感じる患者の不安を緩和することが必要な場面が多く、医療隠語の使用はその一つの方法である。同時に、隠語の使用は真逆の結果をもたらす可能性もあるため、場面に応じて隠語使用の適否の判断をすべきである。そうした判断には患者との接触など勤務経験に加え、勤務先特有の習慣など、さらに配慮場面の理解に関わる文化的な背景知識も必要であると考えられる。現場での経験の乏しい看護師や外国人看護師にとってそのような判断はすぐに不可能であると推測されるため、隠語の適切な使用法は研修で導入することが望まれる。研修に必要な方法の考案のためのさらなる調査実施を今後の課題とする。
(popova.ekaterina_islu@mail.ru)

参考文献

- 1) 桐田久美子・岡崎寿子・八代利香・宮内信治・Gerald T. : 臨床現場における外来語・略語・隠語の使用状況と看護師の認識, 日本農村医学会雑誌, 55-6, pp. 610-617 (2007)
- 2) 江藤裕之・岸利江子・岩崎朗子・坂本ちより・頭川典子・青木三恵子・久保田智恵・杉浦絹子・八尋道子: 医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察, 長野県看護大学紀要, 第4号, pp. 31-39 (2002)
- 3) ポポヴァ エカテリーナ: 医療現場における業界用語の使用状況—外国人看護師候補者の学習支援に向けて—, ことばと社会, 第22号, pp. 58-84 (2020)
- 4) ポポヴァ エカテリーナ: 看護師の語りから見た業界用語の使用上の課題—問題発生の原因解明を目指して—, 専門日本語教育研究, 第23号, pp. 27-34 (2021)

シンポジウム

シンポジウム

「医学用語からみる専門語彙の特徴とその教育」

シンポジウムの趣旨

稲田朋晃（十文字学園女子大学）

近年、日本語を学びながら、介護、看護、理学療法、医学など、さまざまな医療分野での活躍を志す外国人が急増しています。専門日本語教育において、語彙の果たす役割が大きいことは言うまでもなく、本学会でもこれまでさまざまな分野の語彙に関する研究報告がなされてきました。本シンポジウムでは、専門語彙の中でもとりわけ語数が多く、また習得のための難度も高いと思われる「医学用語」をとりあげ、その言語的特徴や、非母語話者への効果的な指導方法などについて議論します。

本シンポジウムでは、まず医学用語教育の現状と困難点について、学習者の視点から語ってもらい、その後、それに応える形で、各登壇者に専門家の立場から発表していただく形式をとります。

まず、留学生として日本の医学部で実際に医学用語を習得してきたダン・タン・ファイ氏に、医学用語を学ぶ際の困難点、工夫した点などについてお話しいただきます。続いて、長年、介護分野の日本語教育に携わり、近年は医学用語の分析と教材開発に注力されている三枝令子氏に、医学用語の特徴についてお話しいただきます。次に、日本語学術共通語彙リストを開発し、語彙の教育法、評価法などにも精通する松下達彦氏に、医学用語をどのように学ぶべきかについてお話しいただきます。最後に、医師免許を持ち、医学英語の教育および医療通訳の分野で活躍される押味貴之氏に、医学英語教育における語彙指導の考え方と、教育実践についてお話しいただきます。

異なる背景を持つ登壇者による異なる角度からの考察と、フロアからの質問をふまえた総合討論を通して、専門語彙の教育方法についての新たな示唆を得ることを目的とします。

学習者から見た医学用語

ダン・タン・ファイ（国際医療福祉大学医学部 5 年生）

ベトナム出身の発表者は、来日してから日本語を初級から学び、日本の医学部で医学的知識・技術の獲得と日本語の習得を並行して行ってきた。日本語レベルが上級に達した今、過去を振り返って医学用語学習における困難点と工夫した点について整理する。医学用語の学習が困難な理由としては、漢字の読みが複数ある語があること、異体字、略体字が多いこと、英語だけでなくドイツ語など他の言語由来の語もあること、痛みの性状を表すオノマトペが多いことなどが挙げられる。発表では、それぞれ例を挙げながら解説する。

医学用語学習の基本は、読解、プレゼンテーションなどの言語活動を通して、医学的な文脈の中で覚えていくことである。一方で、語の構成を意識することで覚えやすくなるものもある。例えば、英語の構成要素との対応が明確な語（高脂血症 = Hyper + lipid + emia）や、ベトナム語の漢字語（漢越語）との対応が明確なもの（高血圧 = cao huyết áp）は、語構成を意識することが効果的である。

医学用語の特徴

三枝令子（専修大学）

医学書に出てくる語種や品詞の出現頻度をみると、語種では漢語、外来語の割合が高いこと、品詞では名詞、接辞の割合が高く、助動詞の割合が低いこと等が指摘できる。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のレジスターの中では、白書にもっとも近い構成になっている。

動詞語等の個別の用例を観察すると、医学用語では医学独特の用法に加えて、一般語と共通した語彙でありながら異なる使い方をされる語も多い。また、常用漢字外の漢字使用が多く、その表記の複雑さ、多様性によって、非母語話者にも、母語話者にも医学用語を難解なものにしている。さらに、医療面接等の患者とのコミュニケーションの必要性が医学書の語彙に反映し、オノマトペを含むたとえる表現が多用されていることも特徴としてあげられる。

医学語彙の教育 ―何をどういう順序で学ぶか、いかに学ぶか―

松下達彦（東京大学）

まず、効率的な語彙学習順序を考えるため、医学書コーパスについて「語彙階層分析」(Matsushita, 2012; 松下, 2016) を行い、異なる語群の「テキストカバー効率 (TCE)」(同上) を調べた。一般に理系テキストは、文系に比べて、理系に偏った専門的語彙の重要度が高いが、医学テキストは、その傾向が極端である。膨大な専門語彙の日本語と英語をとともに身につける必要があり、基本語彙や基本文法がわかるようになったら、早い時期から生物・医学語彙の学習を進める必要がある。中級レベルの学術共通語彙は重要だが、上級の学術共通語彙や中上級の理系共通語彙に比べると、より一般的頻度の低い生物・医学語彙のほうが、重要度が高い。ただし、診察時には専門語を日常語に言い換える必要もあり、患者とのコミュニケーションも必要なので最終的には幅広い語彙を学ぶ必要があろう。また、医学のように専門性の高い分野では、専門語の学習は専門知識の学習そのものであり、辞書記述レベルの語義理解では不足で、専門知識の体系に位置づけられていなければ使えない。専門分野の文脈の中で学習する必要がある。

医学英語教育における医学用語教育

押味貴之（国際医療福祉大学）

「日本医学英語教育学会」では 2015 年に「医学教育のグローバルスタンダードに対応するための医学英語教育ガイドライン」を発行し、その中で Vocabulary・Reading・Writing・Communication という 4 つの運用能力に関して、それぞれ「医学部卒業時に全員が習得すべき内容」と「医学部卒業時に習得が望ましい内容」に対応する目安を設定している。このうち Vocabulary に関する前者の目安としては「医療面接・身体診察・患者への病状説明や指導・医療情報記載・症例プレゼンテーションに必要な基本的な英語表現を使うことができる」と設定している。この学修目標に到達するためには「内容統合型学修として医学を英語で学ぶこと」「それぞれの医療場面での基本表現を反復して習得すること」「一般英語と医学英語の両方を学ぶこと」「医学英語を分解して理解すること」「実際に英語を使う医療現場を再現して評価すること」が重要となる。

第24回 専門日本語教育学会研究討論会誌

2022年3月3日発行

© 専門日本語教育学会 2022

専門日本語教育学会事務局

京都産業大学 渡辺史央研究室

〒603-8555 京都市北区上賀茂本山

TEL&FAX: 075-705-1567

E-mail : office-stje@kir.jp

発行：第24回専門日本語教育学会実行委員会

佐藤 尚子（千葉大学・委員長）

稲田 朋晃（十文字学園女子大学）

品川なぎさ（国際医療福祉大学）

田中 啓行（中央学院大学）

吉野 文（千葉大学）

専門日本語教育学会